

日本・トルコ友好の父・山田寅次郎

前坂 俊之(静岡県立大学国際関係学部教授)

一八九〇年(明治23年)九月十六日夜、トルコ皇帝の特使が乗った軍艦「エルトゥールル号」(2344トン)が和歌山県串本町沖の熊野灘で暴風雨によって遭難、沈没した。



同号はトルコと日本との友好を深めようと約六百人の大使節団を乗せ、一年もかけてアジア一周の大航海の末に来日して明治天皇にも会見し、日本側の大歓迎を受けた。三ヶ月間の滞在を終え、神戸港に向かって帰国途中であった。

<写真は遭難現場>

遭難には地元串本町らの住民が必死の救援活動に当たり六十九人を救出したが、トルコ軍人五百八十一人が犠牲となった。



日本政府は生存者を軍艦二隻で送り届けたが、この丁重な日本の措置はトルコをいたく感激させた。

遭難を聞いて「犠牲者の遺族に弔慰金を送りたい」と立ち上がった青年がいた。山田寅次郎、二十四歳である。

<写真は遭難碑>

山田は一八六六年(慶応2年)八月、江戸見坂(現、東京都港区)生まれ。小学校をおえると英、独、仏語などを学び、外国雄飛を夢見ていた。

ジャーナリストとなり柴四朗、尾崎紅葉らの文学者や福本日南らの新聞人とも親交があり、茶道「宗偏流」の家元であった。

「同じアジアの民として、遭難したトルコ人民に同情する」と新聞でキャンペーンし、全国各地

で講演会を開いて義援金五千元(今では約1億円に相当)を集めた。外務大臣・青木周蔵のアドバイスで自ら届けるためイスタンブールへ渡り、オスマントルコ皇帝のアブドゥル・ハミド二世に会見し、感謝と大歓迎を受けた。



皇帝は山田が気に入り、「ここに留まって日本文化を軍人に教えてほしい」と要望した。山田は士官学校教師となり、日本語や日本学を教えるが、その教え子の青年将校の一人に、一九二三年(大正12年)に「トルコ共国」を誕生させた近代トルコの父、共和国初代大統領・ケマル・アタチュルクがいた。

<山田寅次郎>

当時、日本とトルコは隣国・ロシアから圧迫を受け、ロシアが共通の敵であった。日露戦争が始まるとトルコはその行方に最大の関心を示した。山田は諜報活動でこの勝利に陰で貢献した。



ロシア・バルチック艦隊がどのルートで日本に向うのか。ロシア黒海艦隊が本体に合流するかどうか、勝敗の行方を左右する日本側が一番知りたい情報であった。

<ガラタ塔から見たイスタンブール市内>

駐ウィーン公使・牧野伸顕から「黒海艦隊の動向を監視して欲しい」の秘命を受けた山田はボスポラス海峡を見おろす丘の民家を借り、望遠鏡で看視した。



ある日のこと、ポチヨムキン号らの艦船が石炭を積込み、艦隊が出航したことを牧野伯に急報するなどバルチック艦隊の情報を逐一流し続けた。

士官学校を辞めた後も、山田はイスタンブールに留まり、中心街に立つガラタ塔近くで日本の工芸品を扱う“日ト貿易”の店を開店し、トルコ貿易の先駆けになった。これがその後の「大阪日土貿易協会」に発展していく。

<写真はガラタ塔>

一九二四年(大正13年)五月、日本はトルコ共和国と正式に国交を樹立、翌年にイスタンブール、東京にそれぞれ両国大使館が開設されたが、開設に当たっては、山田が全面的に協力し実現した。

山田は明治から大正にかけて、通算約二十年にわたってイスタンブールに滞在し、国交がなかった日本とトルコの間には友好の架け橋を築いた「民間大使」であった。トルコ人ムスリムたちは、『アブドル・ハリル山田パシャ』と呼んで、尊敬していた。

「トルコ人の最もよく知っている日本人」なのである。

世界で最も親日的な国はトルコである。日露戦争の勝利をわがことのように喜び、町中の道路に「東郷通り」「乃木通り」や『東郷ビール』などの親しみをこめて日本人名がつけた。

そのきっかけを果たしたのが山田である。1957年(昭和32)91歳で亡くなった。

禁転載